ト名ノリケレ共、御番頭初鹿野傳右衞門云ヤウ、春日ニテモ天照太神ニテモ、御斷ナクシテハ通シ難シトテ、川風ニ吹レテ二時計リ待テ、ヤウ〳〵御門ヲ開テ通シケル、猷廟（德川家光）ノ仰セニハ、ナゼ遲カリツルト御尋アリケレバ、局ハカヽルコトニテ、遲滯致シタリ、私ガ名ヲ申タレバ、春日ニモセヨ、天照太神ニモセヨ、斷ナクテハ通シ難シトテ、堅ク守リ申候、ヒトヘニ御威光ノ程有難ク覺ヘ申候ト申上ケレバ、上ニモ笑ハセ給ヒ、門ノ出入ハ固ク申付置ユヘ、サモ有ントナリ、翌日局ヨリ菓子ヲ平川口御番所ヘ贈テ、其勤勞ヲ慰マル、

〔百家琦行傳四〕川村瑞軒

瑞軒、はじめは十右衞門と呼、後に瑞軒と改む、原は車力にて東武の產、神田、淺草、芝などに住て、初は住處定らざりし、若き頃は家まづしく、一時京攝にゆきて活業を做べしと旅立せしに、路費乏くて行事あたはず、大井川の邊より轉回（ひきかへ）しけるに、懷裏に一もんの路費もなく、路上人の飡さして捨たる西瓜の皮などをひろひて飡し、あるは畑のほとりに切捨たる瓜茄子をひろひて飡、辛して命をつなぎ、江戸に歸り、品川宿に知己の家のまへ過りかぬる仔細あり、裏町をよぎりて、塵芥場の中にて人の捨たる古き雪踏の、かたしづゝの腐たる如きものを、二三足看著いだし、此皮をとりて、川の中にて能洗ひ、路傍の垣下のうちより、細き竹を四五ほん拔とり、かの皮を三角に切て結びつけ、蠅拂子といへる物をこしらへ、然して路上かはの蠅はたき、皮の蠅はたきと呼て、賣あるきけるに、江戸はさすがに繁花の地にて、忽ち是を買ふもの有て、當日夕暮には殘らず賣きり、やう〳〵百餘孔の錢を得て、あやしく命をつなぎけり、次の日よりは、往來の人のはき捨たる草鞋、あるは馬の鞋など多く拾ひあつめ、川の中へ漫しおき、土をよく洗ひおとし、泥土のつかふ寸莎といへる物に刻み、泥匠の家にもて行きて賣けるに、元來やはらかにて、孚寸莎にも猶勝りけるにぞ、這職の人は悟んで是をもとむ、是より十ゐもんが寸莎とて、諸方より求め來り、大い